

# 4 地域ミーティングのうねりを全国に

---

地域ミーティングのねらい……………	94
地域ミーティング開催報告……………	96
地域コーディネーターミーティング報告……………	110
ポスト地域ミーティングの動き……………	114
豊中市の ESD ……………	118
キックオフミーティング報告……………	122

# 地域の相互サポート体制づくりで 地域・学校で ESD の推進を

地域ネットワーク PT リーダー 森 良

ESD を地域・学校で推進していく鍵を握っているのは、地域の推進の核となる担い手が、行政・企業・NPO などに働きかけていくうえでの目標設定とプロセスデザインをしっかりと行うことである。

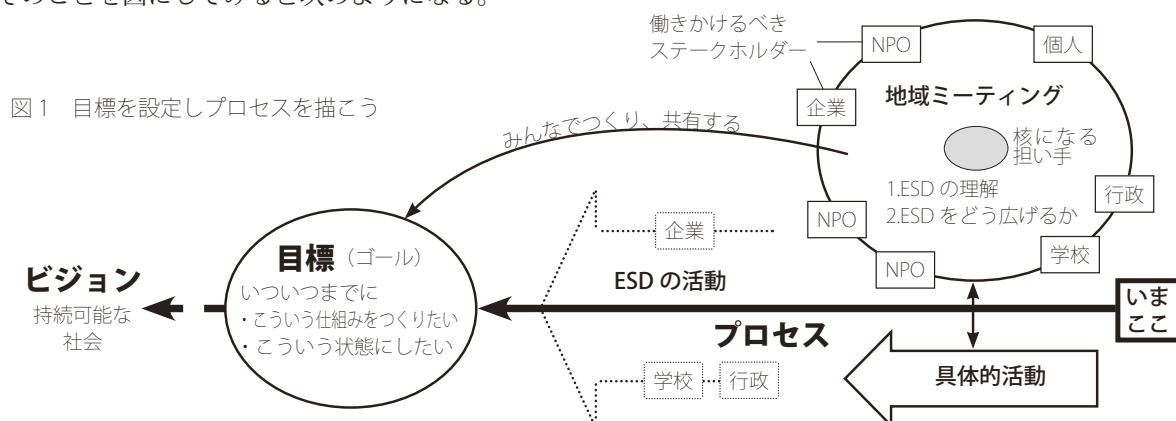
## 目標とプロセスを描こう

目標とプロセスは地域ごとに多様なものとなるが、共通していえることは次のことだ。

つまり、これまでの学習活動やまちづくりと ESD とのちがいが 2 点あるが、それをわれわれの共通目標としうる。一つは、子どもや市民が学習や自治の主体となること、もう一つは、アジアや世界とつながることである。

そして、「持続可能な地域」「相互扶助的な市民社会」のそれぞれの地域での具体的なプロセスと到達イメージを地域の関係者たち（ステークホルダー）が共有しながらつくりあげていくことが大切であろう（そういう場をつくっていくこと自体が ESD である）。

そのことを図にしてみると次のようになる。



## 地域ミーティングはとっかかり

ここでは今その地域にいる核になる担い手の役割が重要である。そのため地域 PT では年に 1 ～ 2 回開く地域コーディネーターミーティングを重視している。核となる人びとが今やっている活動が、発展したりつながったりして地域を動かす ESD 活動になっていくからだ。地域ミーティングはあくまでそのとっかかりにすぎない。

ESD-J は、2003 年度に 15 カ所（仙台、岡山、札幌、九州、東京、中部、浜松、愛媛、岐阜、広島、沖縄、新潟、関西、富山、奈良）、2004 年度に 8 カ所（鳥取、福井、埼玉、長野、千葉、栃木、三重、東京）の計 23 カ所で地域ミーティングを開催してきた。2005 年度は ESD の 10 年のスタートの年なので、できれば今年度中に 47 都道府県のうちの残りの 25 カ所で開催したい。

地域ネットワークミーティングの役割は 2 つある。一つは、地域のステークホルダーに ESD の意味を理解

し共有してもらうことである。だから市民団体だけでなくぜひとも行政、企業、学校関係者を招いて開きたい。

もう一つは、さまざまな主体を巻き込みながら、いかに ESD を地域や学校で広げていくかの戦略を描くことである。そのためには、地域ミーティングをつくっていくプロセスが大切である。実行委員会などの準備の話合いのなかでそのことが意識され、完璧でなくてもいいからどう働きかけていくかのイメージがつけられ共有されていくとよい。

## 地域の相互サポート体制を

地域 PT の役割としては、第 1 ステップ（地域ミーティングを開く）を終えた地域が第 2 ステップ（地域のステークホルダーを巻き込んだ活動の展開）にすすんでいくことをサポートしていきたい。

そのために、近い地域同士で地域ブロックごとに集まり、目標とプロセスデザインを共有し合い、相互に評価・アドバイスし合う体制をつくる（図 2）。

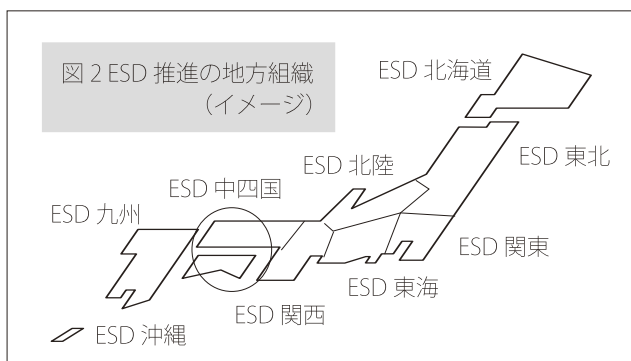
そこに向けて、2005 年度はできるところから各ブロックごとに「持続可能な地域づくり・ESD 実践交流ワークショップ（または見本市）」を開くことを提案したい。これは、地域で行われている ESD 的な学習や活動の担い手に集まってもらい、それぞれの実践を紹介し合い交流し合って、相互サポートの方法を話し合っていく場である。

地域 PT のメンバーは、地域の ESD 戦略を話し合う場に出かけてアドバイスしていく。必要であれば、専門家を呼んだり、共同で研修（たとえば ESD スタディーツアー）をしていくのもよいだろう。

そしてそれらの「実践交流ワークショップ」を集約して、2006 年 2 月くらいに「ESD を既存の学習の場に溶け込ませるためのシナリオづくりワークショップ」を開く。この「シナリオづくり」の意義について国連の国際実施計画では次のように述べている（182 ページ）。

「広範囲でありながら関係する ESD のために必要な革新を育む特別な手段として、シナリオの開発がある。つまるところ、DESD は地上の何千もの地域の状況下で ESD が実施されることを目的としている。これは、ESD を独立したプログラムとして行うのではなく、多くの異なる学習の場に ESD を統合することである。標準化されたプログラムを提案することはできないし、すべきではない。しかしながら、たとえば、さまざまな種類の学校や成人の学習サークル、開発計画の枠組、異なる地理的・社会文化的情況のなか、異なる科目の枠組のなかなどにおいて、質の高い ESD とはどのようなものであるかについて、いくつかのシナリオを描くことは役に立つであろう。各々のシナリオには、とりわけ、そしてそれに対応する状況に応じて、以下のものが含まれる。

- 持続可能な開発についての地方の中心的な課題がなにであるかを発見する方法
- 可能な学習戦略
- たとえば環境の変化をモニタリングする調査研究に児童を参加させるような、学習の場（学校、成人プログラムなど）と共同体のリンクを育む方法
- 地方の知識と文化を統合化させる方法
- 持続可能な開発の原則にもとづき、内容を地方で決定することを可能にするカリキュラム開発プロセス  
このようなシナリオは、いかに ESD を最適実施させるかについての地方での検討のための資源となる」。まさに今、地域ではこのようなシナリオと実践事例が必要とされているのである。



## ESD 地域ミーティング in 福井

開催日：2004 年 11 月 20 日（土） 13：30 ～ 17：00

場 所：福井県教育センター 3 階会議室 301-303（福井県福井市大手 2-22-28）

主 催：アースリンク（NPO 法人 コラボ NPO ふくい 国際部）、ESD-J

連絡先：NPO 法人 コラボ NPO ふくい 担当：山本 康夫

〒910-0844 福井県福井市長本町 206 NPO 共同オフィス

TEL & FAX：0776-54-0828

E-mail：info@collabo-fukui.com

参加者：参加人数 14 名（主催団体会員、県内 NPO・市民団体関係者、教員、会社員）

スケジュール： 1. 主催団体挨拶

アースリンク（NPO 法人 コラボ NPO ふくい 国際部）代表 吉村 和美

2. 「ESD ってなあに？」

ESD-J 理事（地域ネットワーク担当） 森 良

3. 「ふくいの ESD」

福井における ESD と同じような取組みをしている団体の活動事例発表）

ファーム・ビレッジさんさん

中川 清

NPO 法人 コム・サポート・プロジェクト

高畑 英樹

NPO 法人 エコプランふくい

吉川 守秋

NPO 法人 ラピュタ創造研究所

竹本 加良子

4. 「わたしの ESD」

ワークショップ「持続可能な社会・生活」ってなんだろう？

5. 交流会

### ■内容紹介

#### ●「ESD ってなあに？」

森良氏から「持続可能な開発の教育 10 年」とは何か？について説明をいただいた。私たちの生活は、地域は、地球は持続可能か？という問いかけから、持続可能にするために必要なこと、地域からの教育、学習の必要性、これまでの市民活動や学習活動と ESD の違いなどについて紹介された。本来の公共を実現するために、地域から当事者、市民が意思決定を行っていくものであり、「自治の主体へ市民を育てる学び」が必要であることが地域での取組みの課題として挙げられた。

#### ●「ふくいの ESD」

身近な活動事例をとおして ESD に対する理解を深めるために、福井で活動している NPO、市民団体から ESD と同じような取組みを行っている活動を紹介いただいた。

##### （1）安全、安心をとどけるファーマーズ・ビレッジ

米粉でつくったお米パンを食しながら、「農」と「食」をとおして人と地域の共生をめざした活動を紹介した。農業者と消費者の顔の見える関係を大切にしながら安全、安心な農産物を提供する活動の紹介とともに、農業者のみならず消費者を育てる教育のあり方を提案した。

## （２）自立生活をめざした活動

障害者も健常者も同様に、自分の生活に関してすべて自分の決断と責任で行っていく自立生活をめざした活動を紹介した。特定の人を締め出す社会は弱くもろい社会であり、みんなが同じチャンスを与えられ、多様な人びとが共生していける社会が持続可能な社会につながっていく。



## （３）親子ふれあい企画での活動実践紹介

小学校のPTA 主催による親子ふれあい企画での自然エネルギー教室を報告した。太陽熱を利用したソーラークッカーの体験活動や省エネルギークイズを、参加した親子もたちの感想とともに紹介した。体験やクイズをとおして自然エネルギーを身近に感じることで地球環境問題とのかかわりにも目を向けていくことの実感を報告した。

## （４）持続可能な地域社会づくり

武生の「蔵の辻」における持続可能なまちづくりの取組みを報告した。もとの再開発ビル立地計画が潰れて既存の蔵と町並みを整備した「蔵の辻」。そこに地元作家のギャラリーや演奏会、習いごとといったソフト企画を実施し、武生というまちにあったライフスタイルを提案、近隣農村の食材を武生市中心市街地のレストランにて提供するなど他の地域との「人、モノ、文化の交流」、「資源の循環・経済の循環」を図っている。

### ●「わたしの ESD」

「持続可能な社会・生活ってなんだろう？」という問いかけから、参加者自身の持続可能な社会・生活についてワークショップを行った。参加者各自の考える持続可能な社会・生活について、具体的な場面や思いを書き出し、同じようなものをグループ分けしてまとめ、それを全体で共有した。さまざまな持続可能な社会・生活のかたちが浮かびあがり、多様性をもった持続可能な社会・生活のあり方を感じるとともに、参加者独自の持続可能な社会・生活のイメージをもつきっかけになったのではないかなと思う。

## ■今後に向けて

ESD という言葉すら知らないという人がほとんどである現状において、今回の地域ミーティングで ESD について参加者自身がそれぞれの ESD をあいまいながらも感じてもらえたと思う。今後は、ESD レポートを読む会や ESD と同じような事例発表会など定期的に ESD について話し合う場を設けて、ESD を知る、わかる機会を増やしていきたい。また、さらに広く市民や NPO、学校などのさまざまなアクターに足を運んでアプローチし、ESD ネットワークをゆっくりと確実に広げていきたい。

報告：山本 康夫（NPO 法人 コラボ NPO ふくい）

## ESD 地域ミーティング in 埼玉

開催日：2004 年 12 月 11 日（土）10:00 ～ 16:00

場 所：埼玉県東松山市 市民文化センター（東松山市六軒町 5-2）

### 持続可能な社会を協働で築こう！

主 催：「第 4 回環境まちづくりフォーラム・埼玉」実行委員会持続可能な開発のための教育の 10 年推進プロジェクト

協 力：ESD-J

連絡先：持続可能な開発のための教育の 10 年さいたま 担当：長岡 素彦

〒 350-1174 埼玉県川越市かすみ野 2-8-4

TEL・FAX：049-233-0402

E-mail：cyberlab@jcafe.net

参加者：参加人数 50 名（10 代から 70 代まで 若者が多かった）

スケジュール： あいさつ

1. 「持続可能な開発のための教育の 10 年」って？
2. 持続可能な開発のための教育の 10 年のさいたまでの取組み報告
  - (1) 地域で持続可能な社会を築こう
  - (2) 若者と持続可能な社会を築こう
3. ワークショップ “「持続可能なまち」って？”
4. さいたまで「持続可能な開発のための教育の 10 年」を推進をしよう！
5. まとめ・あいさつ

### ■内容紹介

#### ●持続可能な開発のための教育の 10 年とさいたまでの取組み報告

まず、ESD-J 理事の森良氏より “「持続可能な開発のための教育の 10 年」って？” というテーマで解説や事例およびこれからのすすめ方などのレクチャーがあった。

次に、持続可能な開発のための教育の 10 年のさいたまでの取組みが報告された。「地域で持続可能な社会を築こう」と題して、①川口市民環境会議より「1 日二酸化炭素削減活動」（1 日で 2,577,361g の二酸化炭素を削減した埼玉エコライフディの取組み）の報告と、②足元から始める ESD として、東松山・環境市民の会と東松山市より、協働で行う環境活動と環境から福祉へ、ホテルから平和へと広がる取組みの教育の報告があった。

そして、「若者と持続可能な社会を築こう」と題して、①東京国際大学下羽ゼミナールがフィリピンで韓国と現地の学生と地球市民になるための「問題解決型」現場体験プログラムに参加し、日本でも産業廃棄物の問題に取り組んでいるという報告や、②彩の国学生ボランティアネットワークによる自主的な福祉ボランティアの活動と学生ネットワークについての報告、そして、③対話プロジェクトと自由の森学園高等学校イラク対話プロジェクト実行委員会の高校生より、バグダッドと高校生がテレビ電話で語り合い相互理解を深めた事例の報告があった。



それぞれの報告に対して活発な質疑があり、「持続可能な開発のための教育の10年」の論議が深められた。

アンケートでは今回の持続可能な開発のための教育の10年さいたま地域ミーティングは有意義なものであると参加者からご評価をいただいた。

また、コメントとして「地域に戻って持続可能な開発を考える必要性を認識した」「若者の取組みに感動した」「市民と自治体との協働の取組みに感心した」などの意見をいただき、参加者それぞれの「持続可能な開発のための教育の10年」への理解が深まった。



### ●ワークショップ“「持続可能なまち」って？”

開発教育協会ユースのファシリテートにより参加者全員が5つのグループに分かれ、ある地域の地図をもとに「持続可能なまち」をつくりあげるワークショップを行った。

白地図の上に参加者がロールプレイにより、環境、福祉、まちづくり、国際理解、開発教育、平和などの多様な視点を折り込み「持続可能なまち」の検討を行い、その後、「現実のまち」と比較して問題点、改善点を論議した。

アンケートでは、このワークショップを自分の住む地域でもやってみたいなどのコメントをいただいた。

### ■今後に向けて

今年2月に行われた第4回環境まちづくりフォーラム・埼玉も「持続可能な開発のための教育の10年推進」をテーマに掲げて実施したように、今後も、これらの活動をとおして市民と行政と企業、民間がラウンドテーブルを設置することをめざし、埼玉において広くESDの理解を促進し、ESD推進を討議・検討していきたい。

報告：長岡 素彦（持続可能な開発のための教育の10年さいたま）

## ESD 地域ミーティング in 長野

開催日：2004 年 12 月 14 日（火） 18:00 ～ 21:00

場 所：信州大学教育学部しなのき会館（長野市西長野 6）

### ESD と地球温暖化防止県民計画（長野モデル）

主 催：長野県環境教育研究会、ESD-J

協 力：コペルニクス・グリーンウッド

連絡先：長野県環境教育研究会 担当：信州大学教育学部・渡辺 隆一

TEL：026-238-4164

E-mail：wataryu@gipwc.shinshu-u.ac.jp

参加者：参加人数 34 名（NPO／環境団体／行政など）

スケジュール： 1. ESD のめざすもの  
2. 温暖化防止長野モデル  
3. 意見交換  
4. 今後への提案

### ■内容紹介

長野県には多様な環境関連団体が活動しているが、ESD を主題に意見交換する場は今回が初めてであった。広報の時間は少なかったが、多方面にメールなどで広報するとともに直前の「環境こども会議」などでも宣伝を行った。おかげで、当日は主催・協賛団体以外からも多様な方々が 34 名も集まりいただけ、貴重な交流の機会となった。

「ESD の理解を図り地域活動との関連を考える」の開催趣旨を説明後、まず、ESD-J 理事として富山の伊藤さんから ESD の説明と、世界と日本の現状についての最新情勢を報告いただき、質疑応答を行った。

当然、「なにをすれば良いの、支援はあるのか」など基本的な質問が多かったが、ていねいな説明で共通理解は深まった。また、NPO の松本さんからは海外との交流など、地域活動が ESD としてどのように機能しているかの例が補足紹介された。その後、野池さんから、長野モデルといわれる地球温暖化防止県民計画について以下のような説明をいただいた（長野県の固有課題なのでやや詳しく報告させていただきます）。

報告者もかかわったこの「長野モデル」は長野県温暖化防止活動推進センターが策定をし、2002 年 5 月に田中康夫県知事に提言したものである。知事は「その内容はたいへん刺激に満ち、（長野県が）めざすべき具体的な姿を記しているものです」と、同年 6 月の県議会の議案説明の冒頭で述べ、県として強く取り組む姿勢を示した。「長野モデル」は温暖化防止の従来の行政計画とはかなり内容が違っている。政府の対策のような「家族が同じ部屋で団らんし、暖房と照明の利用を 2 割減らす」といった「日々節約（コマメちゃん）」的な市民への啓蒙・啓発による対策ではなく、社会システムの転換をもねらった約 20 項目の具体的政策提案になっている。とくに注目を集めたのは「県内すべてのコンビニエンスストア、



郊外型大型店舗の営業時間を午前6時から午後11時以内とする」や「県内の飲料自動販売機台数を半減する」などの対策である。「長野モデル」を引き継いで、県は2003年4月に「長野県地球温暖化対策県民計画」を策定し、知事はこの計画を担当する地球環境課を新たに設けた。しかし現在、県民計画は誕生から1年半を経過したものの実現の見込みはたっていない。

こうした現状のなかで、この計画を蘇生させるために、県民は何をなすべきなのか。行政任せにしないためにも、もっとこういう場を重ねていく必要があるだろう。

以上説明の後、質疑を行った。参加者からは「温暖化防止の関係者らには有名だというが県民はこの長野モデルを知らない、県は広報しているのか」など、改めて市民参加でつくり上げた画期的な本計画の意義と実行を求める声があがった。

休憩後、参加者の一声紹介を行った。松本など遠路からの参集もあり、行政、NPOなどでのそれぞれの活動が紹介され、ESDとどうかかわるのかなど、戸惑いとこれを軸にあらたな連携が模索できるのではないかなど多彩な人びとによる自由な討論が行われた。ESDを軸として世界や日本政府がどう動いているのかが今のところ市民にはよく見えない、長野モデルを生かした地球温暖化防止を軸にさまざまな団体が教育現場にもっと具体的にかかわれないか、など課題は多々残しつつ、「しかし、ESDで多様な地域活動が交流、連携を図ることは大きな力になりそうだ」、という点は共通認識できたのではないかと思います。今後とも、世界や政府、ESD-Jの運動の進展とともに、この長野県でも次のステップへとすすめていきたい。

## ■今後に向けて

長野県には環境関係団体などが数多いが、ESDについては理解が普及していないし、足元の「地球温暖化防止長野県モデル」でさえ理解されていない現状であった。しかし、去る2/4には、「長野モデルのその後を問う」と題して策定にかかわった市民・NPO・行政が一同に会したシンポジウムが地域ミーティング参加者も多数参加して行われ、行政をも動かす市民運動の広がり的重要性などが話し合われた。

県内団体の多様な活動の根底にはESDにつながるさまざまな根が見えるようになった気がする。今回のような集まりを効果的な時期に開催し、意見交換を行うことの重要性が見えてきた。各地の動きと情報交換しながら、長野県での動きをつくっていききたいと考えている。

報告：渡辺 隆一（長野県環境教育研究会）

## ESD 地域ミーティング in 千葉

開催日：2004 年 12 月 18 日（土） 14：00 ～ 16：30

場 所：千葉市蘇我勤労市民プラザ（千葉市中央区今井 1-14-43）

### ～ 地域のみなさんとともに、いろいろな「教育」について考えてみませんか ～

主 催：ESD ちばミーティング実行委員会

連絡先：ESD ちばミーティング実行委員会 担当：星野 智子

〒 263-0031 千葉市稲毛区稲毛東 1-17-6 稲毛ひまわりの会内

TEL：043-248-1248 FAX：043-245-0394 E-mail：tomoko@eco-link.org

参加者：参加人数 30 名

環境活動をしている人、福祉や教育分野で働いている人、ボランティア活動に関心のある人など

スケジュール： 1. 趣旨説明

2. 地域の活動から テーマ「私の活動は ESD とこうつながっています」

パートナーシップ：ちば環境情報センター 小西 由希子

環境教育：ちば環境情報センター 田中 正彦

福祉教育：オリーブハウス 加藤 裕二

シュタイナー教育：あしたの国まちづくりの会 野澤 汎雄

開発教育：手をつなぐ NPO の会・千葉 林 浩二

3. ミニレクチャー「ESD ってなに？」

ESD-J 大島 順子

4. 全体ディスカッション

「持続可能な社会ってどんな社会？」

「地域内のつながり・連携の可能性を考えよう」

「これからの人づくり、教育に大事なこと」

5. まとめ

### ■内容紹介

#### ○地域の活動から

話題提供者のみなさんからそれぞれの分野における活動についてお話をいただいた。千葉環境情報センターの小西由希子さんからは行政とのパートナーシップやネットワーク構築についてお話いただいた。情報は公開されているが、その情報を市民が読み解く能力をもっていないとしないとの意見が出された。田中さんからは、同センターの具体的な活動事例の紹介や情報発信の重要性について、活動写真を見ながらお話いただいた。加藤さんからは福祉の現場の課題について、地域の人と壁を乗り越えて協力していきたいが、まだ理解を得られない部分が多い。学校や地域の人たちと融合していける社会を創っていったらという想いを紹介いただいた。野澤氏からは県内にシュタイナー教育を軸にした文化複合施設をつくる計画についてお話いただいた。生涯教育の場として福祉や途上国支援なども視野に入れた場づくりをめざしていると話された。林氏は開発教育にかかわる団体のネットワークの活動について紹介いただいた。地域で子どもをどう育てるか、平和や人権についても含め、地域で関心をもつ人とつながることで活動に広がりをもてたという事例を話された。

### ○ ESD ってなに？ミニレクチャー

ESD-J の大島順子さんから、ESD とはという話を聞いた後、大島さんが住んでいる沖縄での地域密着型の活動について紹介いただいた。その地域にあった、地域の人を中心となる地域変革のための教育を考えており、公共事業漬け（依存型）からの脱却ができるよう、住民と同じ目線で対話を続けている。地域での役場と住民の横のつながりをつくっているという具体事例をお話された。



### ○全体ディスカッション

加藤さんの福祉作業所でつくられたクッキーを食べながら、まず参加いただいたみなさんの活動について紹介いただいた。持続可能な社会ってどんな社会？開発という言葉が受け入れられにくい、未来、発展、まちづくりという言葉に置き換えて考えることもできる、と司会者から発言があった後、大学でネットワークについて研究している方や、ごみ問題にかかわって公民館レベルでの活動をしている方、仕事で培った ISO14000 の知識を地域活動に生かしたい方、田んぼや里山づくりをしている方、ベンチャー企業で環境保全事業を考えている方、ネイチャーゲームの指導者の方など多様な人たちから発言があった。

市民・NGO と研究者がいっしょに共に高め合うことができる場を提供することができるので、大学をもっと活用したらよいという意見や、地域活性化促進事業など行政の事業に積極的にかかわること、地域が持続可能であるために食糧生産をどれだけできるか、一次産業がどれだけ ESD にかかわれるか考えること、千葉をどう自立させるのか？将来に向けての方向性について考えようなど、積極的・具体的な提案が出された。

課題として、開発業界にいる人や環境教育業界にいる人など、めざすものはいっしょなのになかなか人がつながっていない、それを ESD をとおしてどうつなげていくか、ESD は環境活動をしてきた人がすすめているものというイメージがある、福祉の分野などの人たちからは警戒心がある、関東での横の連絡をどうつなげていくのか？などが挙げられた。

つながりがないものをどうつなげていくのか？が課題。そしてそのプロセス自体が教育なのではないか？という意見が出た後、大島さんからつながることに価値観をもち、自分の活動とつながることがどう跳ね返るのかを考えていかないとならないとコメントがあった。

つながることの重要な目的の一つが、地方自治・行政の部分に入っていくこと。大同団結できるところ、仕組みを変えるところ、働きかけるところそれぞれがある。地域が持続可能になるために市民が意思決定にかかわれるのか？問題解決にどうかかわれるのか？ということを考えても千葉には問題点があるという点も提起された。

### ■今後に向けて

持続可能な千葉のビジョンはなにか？2050 年の千葉をどうしたいのかということ語り合う。政治・経済・社会はどうしたらいいかのビジョンワークショップをやる。2050 年までになにをどうしたらよいかというロードマップをつくるための夢を語る場をもってもよいのではないかと、という提案があり、またその具現化する場所として、今日紹介された場なども活用したいとの声があった。まずは今日集まった人たちを中心に、連絡を取り合うことになった。

報告：星野 智子（ESD ちば実行委員会）

## ESD 地域ミーティング in 栃木

開催日：2005 年 2 月 11 日（金）13：30 ～ 16：30

場 所：宇都宮大学教育学部棟 2301 教室

主 催：宇都宮大学循環型社会共同研究チーム、ESD-J

連絡先：宇都宮大学循環型社会共同研究チーム 担当：陣内 雄次

TEL：028-649-5366

E-mail：jinnouhi@cc.utsunomiya-u.ac.jp

参加者：参加人数 18 名

スケジュール： 1. オリエンテーション

2. ESD-J に関するレクチャー 村上 千里（ESD-J 事務局長）

3. ワークショップ「ESD を栃木ですすめていくうえでの可能性と課題」

4. まとめ：ワークショップの結果の共有化、今後の栃木での取組みについて

### ■内容紹介

#### ●持続可能な開発のための教育の 10 年について

##### （1）ESD-J とは？

村上千里氏から「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」についての紹介の後、持続可能な開発の概念やこれからのあるべき教育と大人との関係を、図を交えながら説明された。そしてこれからはそれぞれの活動を発展させるために地域のなかでテーマの異なる団体とも共通の課題をもち、ネットワーク団体への参加をとおして互いがつながることの重要性が呼びかけられた。

##### （2）ESD-J に取り組むために

持続可能な社会というものは環境教育・人権教育などバラバラに行われてきた教育を統括しうるものであるが、まだ方向性や答えは見つかっていない。それらを見出すためには将来、社会を担う人材を育てる必要があり、従来の「教える・教わる」の関係ではなく、互いに学び合うことができる関係を築くことが重要となってくる。そこでフィールドを学校から地域へと広げるネットワークをつくる過程で子どもから大人を巻き込むことが理想だと話された。

##### （3）どのように広げていくか

一例として、地域の大人が教育・学習活動に参加することが支援する仕組みについて紹介された。学校・企業・環境学習 NPO が協力しプログラムを開発し、プログラム・スキム・トレーニングをとおし保護者や地域の人びとを巻き込む。それが参加体験型学習の実施につながる。

これによると、地域のなかに散在していた年齢も立場もさまざまな人が一つの円のなかに含まれるため、ESD の概念を満たすことになる。このときに、やはり他分野の人とかかわりをもっているコーディネーターの存在が重要になる。

## ●ワークショップ

### (1) ESD とはなにか

ESD-J はネットワーク組織であるとの再認識をしたうえで、情報を共有化し共通の目標をもち、多くの人を巻き込む中心になり得るものであると話し合った。そのためには地域でその概念をよく理解し、互いに取り組んでいこうという気持ちになることが大事になるとの意見を交換した。

### (2) 栃木で取り組む意義

ESD をすすめるうえで重要なポイントである県内にバラバラに存在する多様なセクターのニーズを共通の課題でつなげることについて話し合った。現在、活動をしている人には次世代に残していきたい未来のビジョンを創造し、活動の意義を残す道筋をつくり「なにかやりたい。でもどうしていいかわからない」という人には方法を見出すよい機会をつくれるのではとの見方ができた。

さらに自分たちはもちろん地域で活動しているが、そのなかでその地域のことをわかっていないのではないだろうかとの意見も出た。だからこそ、そのフィールドでは誰とつながればいいかを ESD-J を通じてすぐに理解できれば、情報交換もスムーズになり多くのことが順調にいくはずだと認識した。

### (3) 必要性・重要性について

県や地域にも中間支援センターはある。しかし ESD を本当に理解したうえでネットワークをつくれば、それらとは違ったものができるはずである。今までは問題ごとに各団体がつながっていたが、これからはコーディネーターが目的（たとえば、将来なにを残すか？）を見出し、互いを理解していくきっかけをつくることで、スムーズに直携して活動ができるような基盤をつくっていくことがポイントであると認識された。

## ■今後に向けて

ESD では情報を共有化し、ネットワークをつくることが重要になる。だから情報や互いの意見を共有化して発展できるような場、多くの人が共通の目的をもって入ってこられるプラットフォームのような場をつくっていききたい。

報告：川手 友美子、古川 真衣（宇都宮大学教育学部環境教育課程 1 年）





## ESD 地域ミーティング in 三重

開催日：2005 年 2 月 13 日（日） 13：00 ～ 17：00

場 所：アスト津 3 階 （津市羽所町 700）

### E：ええやん S：すごいやん D：できるやん つなげよに 三重の輪！

主 催：ESD in 三重（国連持続可能な開発のための教育 10 年三重ミーティング実行委員会）

協 力：エコプラットフォーム東海

後 援：三重県、三重県教育委員会、三重県社会福祉協議会

連絡先：国連持続可能な開発のための教育 10 年三重ミーティング実行委員会 担当：脇田 智恵

電話：059-222-5995（みえ市民活動ボランティアセンター内）

E-mail：

参加者：参加人数 43 名（主催者も含む）一般社会人、学生、NPO 関係者、教員、行政職員など

スケジュール： 1. ESD について

森 良（ESD-J 理事）

2. 活動報告

三重県内の地域で活動する各分野の NPO に、パワーポイントによる説明や実演を交えて、報告していただく。

3. ワークショップ

参加者が 5 つのグループに分かれ、「未来へつなぐ理想のまちをつくろう！」をテーマにワークショップを行う。グループ内で自己紹介をしたあと、それぞれが考える理想のまちの要素をポストイットに次々と記入。それを模造紙にグルーピングするなどして整理し、最後に、グループの代表者が参加者全員の前で発表。

4. 交流会

フェアトレードのコーヒーやお菓子をいただきながらの交流会。

### ■内容紹介

今回の三重ミーティングは、社会人や学生、NPO 関係者など 10 名のコアメンバーが中心となって企画し、準備をすすめた。できるだけ多くの人に親しみをもって ESD を理解してもらいたいという願いから、サブタイトルを「E ええやん S すごいやん D できるやん つなげよに 三重の輪！」とした。まず、ESD-J 理事の森良氏による ESD の考え方を聞いた後、前半は、三重県内で小さいけれどもキラリと輝く活動を展開している NPO を招き、活動報告をしていただいた。活動報告を依頼した NPO は、コアメンバーがそれぞれもっているネットワークのなかから各自推薦団体をもち寄り、分野や活動地域が偏らないようコアメンバー会議で配慮したうえで、8 団体を決定した。報告団体の活動内容は次のとおり。

さかなの目たんけん隊

クロムジャパン

トイなおす

DIFAR

山、川、海をフィールドに、自然観察による環境教育

フェアトレードによるカンボジアの雇用支援

壊れたおもちゃを修理し、物の大切さを子どもに伝える

ボリビアの人びとの生活の質向上を目的とした支援



みえ青少年ボランティアネットワーク

高校生に社会交流や意見表明の場を提供し、子どもの権利条約の趣旨を達成する

ダブルシュークリーム 高齢者や障がい者の日常の動作を支援する自助具製作

椿アンサンブル 日本の伝統文化普及により、国際交流や世界平和に寄与

外国籍子ども教育研究会 教育現場や地域における外国籍の子どもを支える仕組みづくり

~~~~~

後半は、参加者全員でワークショップ「未来へつなぐ理想のまちをつくろう！」を行った。5つのグループに分かれ、持続可能な社会を具体的にイメージし、そのアイデアを共有する場をもった。そして最後に5つのまちのなかで、自分が一番住んでみたいまちを投票し、もっとも多くの票を集めたまちを提案したグループに、フェアトレード商品が賞品として渡された。

今回活動報告をお願いした8団体のなかには、活動暦が長い団体から、最近立ち上げたばかりの団体などさまざま、互いに初めて顔を合わせた団体も多かった。各地域では、さまざまなNPO 交流会が企画されているものの、分野や地域が異なるとほとんどネットワークをもっていないのが現実のようだ。しかもそれぞれがもつ課題を共有する場もない。今回は、福祉、環境、人権、国際協力など多岐に渡る分野の方たちが偏りなく集まり、これまでにない新しい交流の場がもてたことは大変意義があったと考える。



## ■今後に向けて

活動報告を依頼した団体のなかには、「自分たちの活動がどのようにしてESD とつながり、どういう場所に位置づけられるのかがまだ理解できない」と感想を述べる人もいた。また、10名のコアメンバーも、今回の三重ミーティング開催までのプロセスでESD を少しずつ学んできたものの、さらに理解を深化させる必要がある。そのため、今回活動報告を依頼した団体の方々とともに、「自分たちがESD の担い手である」、また「活動をととして地域と世界をつなぐ架け橋となる存在である」という、自覚と自信をもつことができる人びとの輪を広げていきたい。そのために、いっしょにESD を考えるための勉強会や会報の作成などをしていき、今回の三重ミーティングで得た「つながり」を持続させていきたいという提案が出されている。

報告：脇田 智恵（みえ市民活動ボランティアセンター）

## ESD 地域ミーティング in 東京

開催日：2005 年 2 月 20 日（日） 13：00 ～ 16：00

場 所：新宿区立環境学習センター（新宿区西新宿 2-11-4）

### 誇れる東京をめざす地域ネットワーク交流会 実行委員会活動計画

主 催：誇れる東京をめざす地域ネットワーク交流会実行委員会

連絡先：NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター 担当：森 良

〒 171-0031 豊島区目白 3-17-24

電話：03-5982-8081 FAX：03-5982-8249

E-mail：ngo-ecom@gaea.ocn.ne.jp

参加者：参加人数 13 名

新宿環境活動ネット 4 名、エコとしま 2006 プロジェクト 2 名、台東区らく環講座 1 名、  
エコスタッフ@めぐろ 1 名、江戸川エコセンター 1 名、中野夢工房 1 名、  
（財）グリーンクロスジャパン 2 名

巨大都市東京で持続可能なまちづくりをすすめるためのネットワークづくりが始まった。その第 2 回実行委員会を「ESD 東京ミーティング」として開催することにした。なぜなら、その目的達成のためのプロセスが、まさに東京における ESD 推進となると考えたからだ。東京ミーティング（＝第 2 回実行委員会）では、今後以下のようなスケジュールで活動を展開していくこと、実行委員会の趣旨と目的、そして 6 月に開催する「地域ネットワーク交流会」の内容などが話し合われた。これらをミーティングの成果として報告する。

#### スケジュール

2005 年 1 月 26 日（木） 19：30～21：00

第 1 回実行委員会

2005 年 2 月 20 日（日） 13：00～16：00

第 2 回実行委員会、東京ミーティング

2005 年 4 月 4 日（月） 18：30～20：30

第 3 回実行委員会

2005 年 5 月 11 日（水） 18：30～20：30

第 4 回実行委員会

2005 年 6 月 5 日（日） 11：30～16：00

第 1 回「誇れる東京をめざす地域ネットワーク交流会」

2005 年 12 月

アクション中間報告会

2006 年 6 月

第 2 回「誇れる東京をめざす地域ネットワーク交流会」

#### ■実行委員会の趣旨

ヒートアイランド、交通事故、大気汚染、無秩序な開発、防災、青少年問題、高齢者問題、介護やバリアフリー、外国人問題など、様々な問題を抱える巨大都市・東京も、昔から問題ばかりなのではなかった。水運による物流のルートと拠点を構成していた川の手・下町と、田園都市・山の手によって形づくられ、近郊農村漁村との物質代謝で成り立っていたエコシティであり、地場産業や歌舞伎・落語などの地域の

文化が栄え、庶民による生活コミュニティを基盤とした自治的なまちであったのである。

東京を持続可能なまち（サステイナブルシティ）に変えていくためには、

1. 持続可能性（循環性、多様性、資源、エネルギーの持続的利用など）
2. 社会的公正（雇用・人権・平和、ユニバーサルデザインなど）
3. 寛容（異なる宗教・文化の共存・多文化共生）
4. 参加（市民自治、市民参加、協働など）

などのコンセプトを、コミュニティをベースとし、地域性に沿って、まちづくりの戦略やアクションプランに具体化していくことが必要である。

そして、その具体化のためには、地域の市民のニーズに立脚するとともに、問題に対応した地域の範囲を設定して適切な協力・協働の体制と計画をつくることが求められる。たとえば、河川や道路は1本なのであり、流域や道路域、関連するアクセス域などの範囲で考える必要がある。また、問題はできるだけ身近なところで解決される必要があり、自治についての自律・補完性の原理を考慮するならば、コミュニティ自治やその基盤となる市民性を育てることを重視しなければならない。

さらに、現状では自治体（区市町村）ごとに1～4の対応がばらばらなことを考えるならば（実際、4についての自治体の対応にはかなりバラツキがある）、それを横につないで経験や知見・対応を共有していくことが不可欠であり、それがまた個別の地域の活動の発展にもつながる。

## ■実行委員会の目的

そこで、とりあえず東京23区の地域ネットワーク型の市民活動・まちづくり団体を対象に、持続可能な都市・東京をつくっていくための相互支援のネットワークをつくるための準備会合を開くことを呼びかける。

このネットワークの目的は以下のとおりである。

- ① 持続可能な都市・東京をつくるための活動・事業・学習についての経験・情報交流と共有
- ② 持続可能な都市・東京をつくるための活動・事業・学習についての合意できる共同行動
- ③ 「国連・持続可能な開発のための教育の10年」の東京における推進

## ■予告

『誇れる東京をめざして、活躍する地域ネットワーク交流会』

日時：2005年6月4日（土）

会場：新宿区立環境学習センター

呼びかけ対象：東京23区あるいは多摩地区で地域ネットワーク型でまちづくりESDを推進している団体

スケジュール：6月4日（土）11:00～

ポスターセッション

6月5日（日）11:30～13:00

ランチ交流会

13:00～16:00

活動事例発表 & 課題共有し第一歩を

## 全国の仕掛け人が集い、相互サポートの関係づくり

地域ネットワーク PT サブリーダー 新海 洋子

地域ネットワークプロジェクトチーム（以下地域 PT）による、地域コーディネーターミーティングは、2004 年 3 月、7 月、10 月、2005 年 2 月、3 月の計 5 回行なわれた。ここでは、過去 5 回行なわれた会議の内容、およびその議論を踏まえて地域 PT がめざそうとしている方向性について述べてみたい。

### 地域ミーティングの成果と課題の共有（2004 年 3 月、7 月）

2004 年 3 月と 7 月に行なった地域コーディネーターミーティングでは、これまで 15 カ所で実施された地域ミーティング担当者から報告を聞き、地域の現状を把握して地域 PT としてなにをすべきなのか、地域に求められているものはなになのかを確認、共有する場となった。実施された地域ミーティングでは、「ESD」という言葉に興味のある人びとが集まり、持続可能な社会とは、持続可能な社会をつくるために必要なこととは、といったテーマで議論を交わした。その成果は、ESD の基本的理解を図ったこと、「教育」をキーワードに環境・開発・人権・ジェンダーなど多様なテーマで活動する人びとやセクターがつながったこと、である。そして持続不可能な社会の現状と地域における教育のありようを共有し合ったことである。と同時に、「ミーティングに集まるメンバーの固定化」「新しい教育の仕組みづくりの難しさ」「動かない地域」「担う人材の確保」といった課題を見出した。

その後、地域ミーティングを開催した多くの地域は、今後どう展開すべきなのか、次のステップの検討に入っている。また豊中、愛媛、岡山など一部の地域では、斬新に ESD の仕組みづくり、地域デザインに着手し始めている。

地域 PT はそういった状況のなか、地域ミーティングの仕掛け人〔担当者〕を「地域コーディネーター」とし、地域コーディネーターミーティングを、「地域の現状や地域ミーティングの成果を共有し、地域に合う ESD 普及のための仕組みづくりを具現化する戦略会議」として位置づけ直した。

### ESD の認知度向上のために～戦略会議 in 名古屋（2004 年 10 月）

戦略会議は、地域で実践している人の声を直接聞いて現状を把握したいという意向により、東京以外のエリアに出かけて行くこととした。まずは 10 月に名古屋で開催。参加者は 9 名で、東京の会議にはなかなか参加できない名古屋を中心に活動している方々の参加を得た。

前半は意見交換の場とし、ESD-J はなにをする組織なのか、10 年のキャンペーンの成果について意見交換し、ESD の概念および ESD を使ってなにを起こそうとしているのかを伝えた。

「教育とは学びと社会参加のプロセスである。ESD は持続可能な社会をつくるための教育であり、その担い手をつくるための仕組みづくりが必要である」

後半は、具現化に向けてどういったプロセスが必要なのかを議論した。そしてそのプロセスそのものが ESD であり、地域の状況によってかわる人びとやプロセスが違ふこと、重要なのは市民の意見を反映させた教育システムづくりであり、地域の主役である市民が地域資源をていねいに掘り起こし、今ある資源をつなげる仕組みをつくり出すことの必要性を共有した。そのために、1) 企業や行政など多様なセクターをつなげる、2) つなげるコーディネーターの養成、3) 国際的な地域性を結びつける、4) 課題と問題解決のためのサポート体制の確立、と地域 PT の役割を確認した。

一方で、参加者から「理想はわかるがどこから手をつけていいのか。そんなことが本当にできるのか。行政や企業はどう考えているのか」などの意見が出され、今後の具体的な動きについて意見交換をした。以下が今後の動きの具体的提案である。

#### ・ステップ 1：ESD の理解を図るための地域ミーティングの開催。

47 都道府県のうち地域ミーティングを開催したのは 15 カ所。ESD への理解を普及し、支える層を広げるために、残り 34 カ所の実施に向けてのサポートをする。地域ミーティングでは参加する人、ステークホルダーを増やし、今後なにかを始めようというムズムズ感を高める。

#### ・ステップ 2：ステップ 1 を実施した地域のサポート

成功事例を知る人びとがコーディネートに入るなど、より地域活動が具体的展開を図るようなフォローを行なう。戦略的に実行する主体が増え、教育機関、行政などの役割が明確化し、地域に応じた具体的な行動が生み出せる場とする。

#### ・ESD と地域ミーティングに関するデータバンクの作成

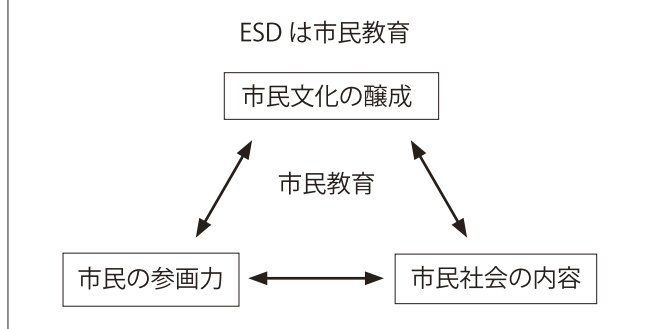
地域での活動が活性化するために、地域の ESD と地域ミーティングに関するデータバンクの作成、成果を分析し情報公開する。

#### ・専門的アドバイザーの設置

地域での活動に専門性が必要な場合、専門的なアドバイスをする人を派遣する。

そして、参加者全員が「ESD の認知度をあげることを大きな課題とし、ESD の必要性を伝える場としてワークショップや研修を積極的に実施することがあげられた。そのさいにいかに企業や行政を巻き込み、社会を変える教育の仕組みづくりを提言するかが重要だと話された。

図 ESD がつくろうとしていること：市民的公共と教育



### 活動を可視化する～戦略会議 in 富山（2005 年 2 月）

名古屋での会議から約 7 カ月後、富山にて 1 泊 2 日の戦略会議を行い、2005 年度地域ミーティング（実施 8 カ所）結果の集約、名古屋で話された内容の具体化、2005 年活動方針を議論した。

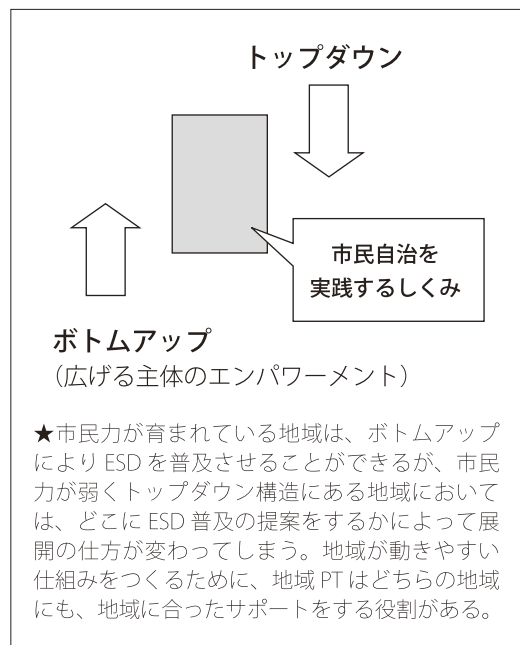


## 地域コーディネーターミーティング報告

まず今年度の反省として、地域ミーティングが 2005 年度 8 カ所でしか実施できなかったことが出された。その原因の一つとして、地域 PT が十分に地域をサポートできず、地域に種をまくことや出始めた芽に栄養を注ぐ体制ができていないことがあげられた。そこで提案されたのは、「地域ブロック」制である。実施した地域を中心に創られる ESD 推進組織であり、実施しようとしている地域や種まきが必要な地域を支える相互サポートシステムである。現在、「ESD- 関西」が取り組み始めているが、北陸、中部でも体制整備がすすめられるようである。

また今回の会議の主要テーマは、ステップ 1 を終えた地域が次にどうすすむのかである。名古屋での会議で提案されたステップ 2 にすすむために、地域 PT としてすべきことを議論した。そのなかで、地域で発せられた市民の声がみえるツールや地域で実践するさいに参考となるシナリオがほしいという声があがり、全国の取組みを把握している地域 PT として「ESD の実践事例」「ESD を既存の学習の場に取り入れるためのシナリオ」を作成することとなった。地域によっては行政が市民参加手法を取り入れて環境基本計画づくりを実施しているところがあり、そこにどのように ESD を取り込んでいくかや、これまでの行政手法（トップダウン）で動いている地域にはどこからアプローチすべきかなど、地域の現状に合わせたシナリオを提示することも提案された。

これらの議論を踏まえ、2005 年度活動方針として、「ESD 活動を地域に見えやすくする＝可視化すること」、具体的な取組みとしては、1) ESD 実践事例集の作成 2) ESD を既存の学習の場に取り入れるためのシナリオづくり 3) 地域交流ワークショップの実施があげられた。



## ESD は魔法の接着剤～戦略会議 in 立教大学（2005 年 3 月）

今年度最後の戦略会議を 2005 年 3 月に行った。参加者は昨年今年と地域ミーティングを開催した地域の仕掛け人 19 名、各地域の最新の動きを共有した。とくに岡山、愛媛、豊中の報告は他地域の参考になる要素が多々あった。

たとえば、

- ESD の進展はミーティングの場ではなく、現場での活動である。ミーティングの場で話していても理屈で終わってしまうので現場で ESD を実施することが大切。それが市長に認められ、議会にも取り上げられ、新聞にも掲載され活動の認知度が上がる。第 2 ステップは実際に活動するなかから公的に認められ、地域全体に認知され公的システムに乗っていくのではないかな。地域ミーティングで仲間を増やしてもなかなか具体的な ESD の進展にはならない（岡山、114 ページ参照）。
- それぞれの地域にふさわしいやり方がある。ただ大事にしないといけないのは会話と行動。それをどうつなげていくかである。実際に地域で行われていることをみせていくことが大切だと考える」（愛媛、6 ページ参照）

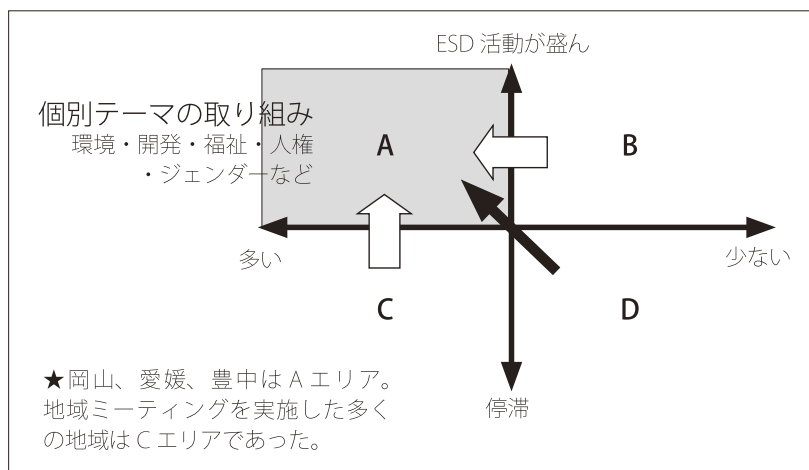


- ESD サロンなど市民のニーズにあった具体的な活動を生み出している。うまくすすんでいるのは、行政担当者のやる気や市民参加がそもそもすすんでいたという背景がある（豊中、114 ページ参照）。

などの意見である。先回の会議で提案された「ESD 実践事例集」にはこのような事例からヒントとなる情報を掲載していくこととなった。

また、現在の地域の状況を把握するために、マトリックス（以下）をつくり、それぞれの地域の現時点の位置を明確にした。

2005年度の地域PTは、先回の会議で出された方針のもとに活動を展開し、いかにAエリアにすすめていくかを戦略的に検討する必要があることを共有した。とくに行政の動きをどうつくるのか、市民参加をどう広げるのか、すすむべきプロセスをどうつくるかが共通課題としてあげられた。



# 岡山市で ESD 推進事業がスタート！

岡山ユネスコ協会理事 池田 満之

## 岡山での地域ミーティングの開催

岡山では、2003 年 3 月 15 日に ESD-J としては 2 番目という早い段階で地域ミーティングを開催した。岡山には、県内の NGO が集まって結成された「国際貢献トピア岡山構想を推進する会」によって、1994 年から毎年「おかやま国際貢献 NGO サミット」を開催してきた。このサミットには、医療、教育、宗教、環境、福祉など、さまざまなテーマが毎年とりあげられ、これまでに約 50 カ国から 200 名近い海外参加者を得て、まさに ESD の先駆的な取組みをすすめていた。この下地が岡山にはあったことから、2003 年の地域ミーティングにおいても、環境、平和、人権、ジェンダー、国際理解、開発教育などにかかわる NGO などがこれまでのつながりのなかで集まり、ESD に関する具体的な話合いができた。それゆえに、この地域ミーティングを受けて、約 1 年間におよぶ準備期間を経た、2004 年 1 月に第 10 回「おかやま国際貢献 NGO サミット」を「ESD の 10 年」をテーマに開催することができた。

## 「ESD の 10 年」をテーマとした NGO サミットの開催

2004 年 1 月の「おかやま国際貢献 NGO サミット」は、その時点で 1 年後にせまった「ESD の 10 年」に向けて、「環境」（地域と地球の未来のために）、「平和」（平和構築のための宗教間対話）、「ジェンダー」（ジェンダーの平等と女性の地位向上）、「国際理解」（これからの国際理解教育）の 4 つの分科会を設けて具体的に話し合った。ここでは、たとえば「環境」の分科会には環境関係の人たちのほかに「ジェンダー」や「国際理解」の分野の人たちも加わるなど、各分科会ともにさまざまな分野やセクターがコラボレートしながらそれぞれのテーマを ESD という視点で話し合った。そして、その流れは、2004 年 8 月に岡山で開催されたユネスコ主催（ESD-J、国連大学高等研究所、国際貢献トピア岡山構想を推進する会、岡山県国際団体協議会などが共催）による ESD の広報戦略を練る国際ワークショップ「持続可能な開発のための教育—マルチメディアの活用」（83 ページ参照）へとつながっていった。

## ユネスコ国際ワークショップの開催

このワークショップは、ユネスコによる ESD の 10 年国際実施計画の策定プロセスのなかで公式に位置づけられていたもので、このため、ユネスコに対して日本が拠出した 10 万ドルの一部が資金的にも用いられていた。国際実施計画の策定過程において、ESD を普及し推進するためのマルチメディア、情報通信ツールの活用方法などについて意見交換し、具体的な実施例の制作を行うことを目的として開催さ

れた。メインの主催者であるユネスコ・パリ本部の ESD 担当部局からの呼びかけに応じ、これまで NGO サミットなどで同様のテーマに取り組んできた経験を有する岡山の NGO 団体および ESD-J などが協力して実施した。参加者は国際機関、教育関係者、ジャーナリスト、研究者、コミュニティワーカー、コンサルタント、NGO など、ワークショップの成果は今後の ESD の普及推進に活用すべく、広報用ポスターやビデオ映像といった実施例と総括レポートなどの形にとりまとめられた。

このワークショップでは、その大きな目玉に子どもたちとの意見交換会があった。岡山では、すでに ESD を学社連携によって地域で実践している地区（京山地区）があり、このサミットではその地区で実際に ESD 活動に参加している小中学生と大学生の代表ら約 20 名が意見交換会に参加し、環境やジェンダーなどの視点から ESD の広報につながるメッセージづくりに取り組んだ。「未来への学び」といわれる ESD の広報戦略づくりに、未来を担う子どもたちが主要なメンバーとして加わり、その声が大事なメッセージとしてとりあげられたことは、このワークショップの大きな成果であり、また、ESD を検討するプロセスにおいて意義深いことであった。こうした重要な国際ワークショップの場で、自分たちの思いを伝えられる「コミュニケーション力」をもった子どもたちを育てていくことも、ESD では大きな観点であり、そういう子どもたちが育ってきている京山地区の ESD の取り組みは、ESD を全国ですすめていくうえで参考になる先駆的取り組みといえる。

### 岡山市京山地区 ESD 環境プロジェクト（岡山 KEEP）

岡山市京山地区 ESD 環境プロジェクト（Okayama Kyoyama ESD Environment Project Japan：通称「岡山 KEEP」）は、ESD のモデル的な取り組みを自らの足元である岡山市京山地区で率先して取り組んでいこうとして始めたものである。その先行プロジェクトとして 2003 年に全世代合同・学社連携による「子どもの水辺てんけんプロジェクト」を行い、その成果を踏まえて、地区内の小中学校の校長先生や公民館長、NGO/NPO の代表、地域の代表などといった主要セクターの代表者が一堂に会し、協働して岡山 KEEP をすすめていくことを合意し、2004 年度から本格的な ESD の取り組みを始めた。

このプロジェクトは、京山公民館・京山中学校校区を対象範囲とし、そこにおける小学生、中学生、高校生、大学生、社会人、市民組織、行政組織、企業などが協働し、世代内、世代間、人と自然との公平的なつながり、相互理解と相互協力のもと、環境面から持続可能な地域づくりのための教育（＝ESD）に取り組む、このプロジェクトに参加した子どもたちが大人へと成長し、そしてその子たちが次の世代を育てていく仕組みがつながっていくように継続して行おうというもので、中学生をその活動の核におきながら「ESD の 10 年」（2005～2014 年）を第一次活動期間として取り組んでいる。

ちなみに、この京山地区は、地区人口が約 2 万 4000 人、地区内に 3 つの小学校、1 つの



岡山 KEEP の活動（中学生を核に地域の主要セクターと全世代が協働で実施）



岡山 KEEP サミット（市長や市議会議員をはじめ、小学生から老人会・婦人会まで、地域の主要なセクターの代表が集まり、未来に向けて話し合う）

中学校、3つの高校、3つの大学、それに図書館を併設した公民館、県の生涯学習センター、2005年の国体のメイン会場となる県総合グラウンドといった学習拠点が集中しており、ESDのコミュニティ・ベースでのモデル的な取り組みを行うのに適した環境条件が整っていた。

具体的には、公的社会教育機関である岡山市立京山公民館、公的学校教育機関である岡山市立京山中学校（科学部）、岡山市立伊島小学校、岡山市立津島小学校、岡山県立岡山工業高等学校、高等教育機関に在学する学生が主体的に参画している岡山大学環境部、学校教育の支援機関でもある岡山市立京山中学校同窓会、市民主体のNGO・NPOである岡山ユ

ネスコ協会、京山ITサポーター、岡山ビデオクラブ、岡山の自然を守る会、旭川流域ネットワーク、環境教育などを専門とする技術コンサルタント会社（企業）の株式会社環境アセスメントセンター西日本事業部。このように、産官学民がいっしょになって活動の核となり、ここまでの活動をリードしてきた。もちろん、この活動には、このほかにも岡山理科大学やノートルダム清心女子大学の学生や、町内会、婦人会、老人会の人たち、岡山市長や岡山市教育長などの行政関係者、岡山大学や岡山理科大学の先生方、地区内にある池田動物園など、さまざまな団体や個人が参加・協力している。

京山地区では、活動の輪を毎年少しずつ広げていき、10年内には周辺域との連携のもとで100万人レベルにこの活動のつながりが広がるようにもっていくことをめざしている。なお、京山地区の取り組みは、地域が抱えている課題で取り組みやすかったことから「環境」の視点から始めたが、ESD的には今後、人権や国際理解などといった地域の課題を次々と組み入れることで、環境活動をベースにしながらも総合的に展開していく考えである。



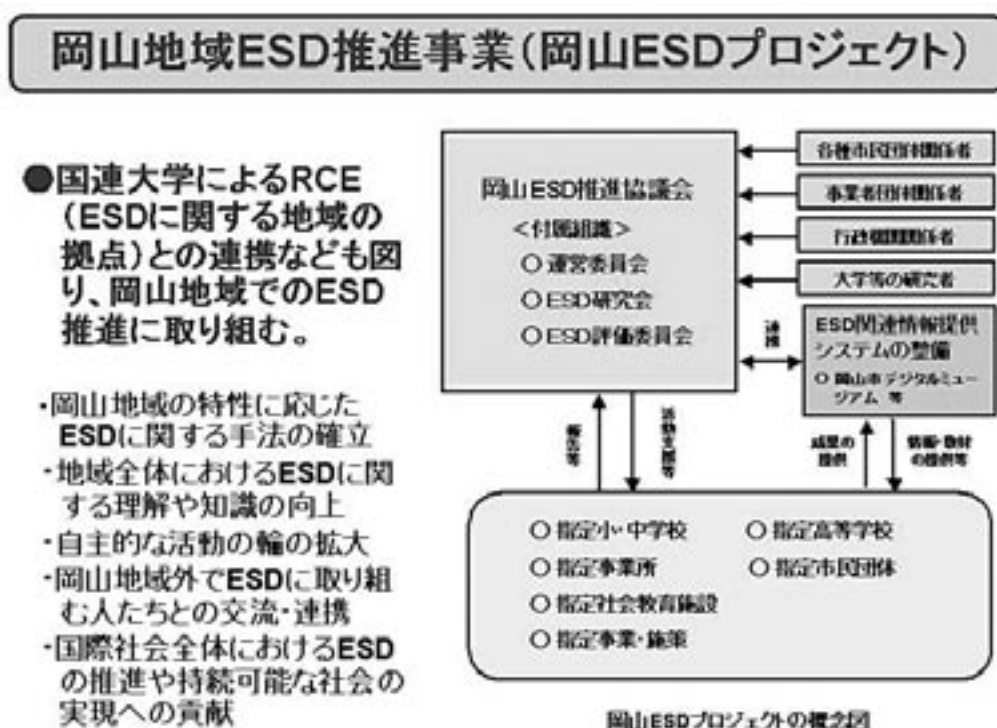
体験エコツアー（夏や冬に地域を飛び出し、地域ではできない体験や交流を行う）



## 岡山地域 ESD 推進事業（岡山 ESD プロジェクト）

岡山では、京山地区のような地域コミュニティ単位での ESD 活動も行われているが、さらに大きな自治体レベルでの取組みも行われており、ESD につながる流れでいえば、地方自治体である岡山市を核とした取組みのほうが先行して行われてきた。それゆえに、2003年3月のESD-Jによる地域ミーティングも、この岡山市を核とした取組みをより活性化させていくためのステップの一つにもなったといえる。

岡山市では、2001年に日本のユネスコ加盟50周年記念事業に取り組み、9月24日にユネスコ・パリ本部の「持続可能な未来のための教育」担当部長や日本ユネスコ国内委員会事務総長（文部科学省国際統括官）などの出席のもとで記念式典を行い、そこで ESD の先例ともいえる「環境パートナーシップ事業」を多くの参加市民団体や企業などとともに報告した。この流れが、2002年のヨハネスブルグ・サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）におけるユネスコ主催「持続可能な未来のための教育会合」で「持続可能な都市を目指して」と題した発表につながり、環境パートナーシップ活動の世界的なネットワーク展開を図る「地球を守る市民の登録者数ラリー」を岡山市として提案した。その後、国連総会で「ESDの10年」が決定される流れのなかで、このラリープロジェクトを ESD の視点で再整理し、ユネスコ・パリ本部の松浦事務局長へ「ESDの10年」国際実施プロジェクトの一つとするよう提案を行った。この提案では、世界の各都市において、まず5%の人が ESD の視点でパートナーシップ活動を行うことを奨励したことから、提案者として岡山市の5%の人がこの活動に参加するように取り組んできた。現時点で、岡山市ではその目標を実現できたことから、他都市への働きかけを行うとともに、新たな展開として、「ESDに関する地域の拠点づくり（RCE）」を提唱している国連大学との連携なども図る岡山地域 ESD 推進事業（岡山 ESD プロジェクト）への取組みを、2005年度より市としてスタートする。岡山市は、この事業を通じて ESD から国際貢献する「国際・福祉都市」をめざしている。



## 補論・豊中市における ESD の受容

「ESD 関西」という存在の介在を含めて

ESD-J 理事（中長期計画 PT リーダー） 新田 和宏



日本でもっとも ESD のすすんでいる地域の一つ、といわれている大阪府豊中市——。

昨秋そうそうに、環境や福祉、ジェンダー、子育て支援などに関係する十数団体が集い、「とよなか」という地域における「持続可能な開発のための教育」をすすめるためのネットワーク組織、「ESD とよなか」が立ち上がった。2005 年 2 月 26 日には、ESD-J による日本キックオフミーティングに先立って、ESD とよなかのキックオフミー

ティング（地域ミーティング）が開かれた。その場にて提案された活動が、じつに多種多彩でおもしろい。豊中でできる持続可能な暮らしをおしゃれに提案する「とよなかスタイル」の発行。行政から原っぱを提供してもらい、自由に語り自由に活動することで人が自然に寄り集まってくる居場所、「人間ビオトープ」づくり。とよなか版「世界（豊中）が 100 人の村だったら」の発行。就学前の家庭に新しい形で地域の教育力を注ぎ込む「赤ちゃんからの ESD 展開」。春夏秋冬「ESD サロン」の開設……。と、ESD を合言葉に、地域の次代を担う「人」といまの自分たちの「暮らし」を育てていこうという機運に満ち満ちているようなのだ。

本稿では、この動きに側面から協力してきた「ESD 関西」（考える前にまず行動ありきという発想のもと、関西の各地にくすぶる ESD の種火をみつけては、とにかく風を吹き込もうという機能集団）のメンバーでもある新田和宏氏に、豊中市でなぜ ESD が受け入れられたのかを「下地的な側面」「主体的な側面」「ESD 関西の存在」という 3 つの視点から考察していただき、それを他地域に生かすための要件としてまとめていただいた（編集部）。

### なにゆえに豊中なのか？

この小論では、大阪府豊中市における ESD の受容について検討してみたいと思います。なにゆえに、ここで豊中のケースをとりあげるのかというと、その理由は、ESD の受容がたいへんスムーズに運んだ豊中を見極めることにより、どのような要因があると ESD が地域にしっかりと受容されるのか、この点についての示唆を得ることができるからです。換言すれば、わたくしたちは、豊中のケース・スタディを通じて、地域において ESD を受容するさいに必要なとされる要件とはいったいなのかなのか、この点に関する考察を深めていくための重要な手がかりを得られるかも知れないと期待するからです。

またあわせて、上記の論点と関連し、「ESD 関西」という存在が果たした豊中への介在についても触れてみたいと思います。



## ESD の受容

ESD の地域実践における第一関門は、なんといっても ESD の受容といえます。この受容がうまくいかないと、第 2 ステップの ESD の展開は空回りしますし、もちろん第 3 ステップの発展もみえてきません。そこで、この小論は、豊中における ESD の受容という点に絞って、その要因を、下地的な側面と主体的な側面に分けてみることにしましょう。

## 下地的な側面

- ① 「とよなかアジェンダ 21」の存在とその中間見直し
- ② 市民と行政との良好な関係
- ③ ESD に先行した ESD に準じる取組みの蓄積

まず、豊中において ESD を受容しえた要因のうち、下地的な側面ですが、第 1 に、やはり「とよなかアジェンダ 21」（1999 年 3 月）の存在が指摘できます。またあわせて、「とよなかアジェンダ 21」の中間見直しも指摘できます。とくに、豊中が ESD を受容した 2004 年は、ちょうど「とよなかアジェンダ 21」の中間見直しの期間と重なりました。「とよなかアジェンダ 21」の中間見直しを行ってきた NPO 法人「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」の井上和彦事務局長から、「環境教育、なかでも自然体験学習をいくら積み重ねても、『とよなかアジェンダ 21』が期待する成果があがらず、目標を達成することはできない」という率直な疑念が寄せられ、あらためて「とよなかアジェンダ 21」の推進の鍵を握るものとして、ESD に対し熱い関心を示されました。

第 2 に、これまで豊中では、市民と行政とが地域の課題解決をはかるさい良好な関係性を培ってきた経緯があります。じつは、「とよなかアジェンダ 21」はその最たるものです。市民・事業者主導で策定した「とよなかアジェンダ 21」と行政主導で策定した「豊中市環境基本計画」とが実現すべき理念と目標とを共有しています。これが、市民・事業者と行政とをブリッジする「豊中方式」と呼ばれるローカル・アジェンダ 21 の豊中としてのあり方なのです。

また、市民と行政との良好な関係という下地があるがゆえに、「ESD 関西」のメンバー（わたくしもその一人）を講師にした 3 回にわたる ESD の学習会に、豊中の市民と行政がいっしょになって参加していただくということが容易に行われました。

第 3 に、これまで、財団法人「とよなか国際交流協会」と「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」が、地域の課題解決に向けて教育的アプローチを地道に取り組んできた蓄積があります。いわば ESD に先行した ESD に準じる取組みが豊中では着実に蓄積されてきたのです。わたくしは ESD を「とりわけ地域において、持続可能な地域社会の形成を目指すための包括的・社会的課題解決学習」と定義していますが、豊中では、そうした学びが実態として先行し、かつまたそれが蓄積されたがゆえに、「ESD の下地」が踏み固められていたのです。



学習会（豊中市「くらし館」において）

## 主体的な側面

- ①「とよなか国際交流協会」と「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」が、中間組織として機能したこと
- ② 行政が当事者意識をもって ESD を受容したこと
- ③ ESD とローカル・アジェンダ 21 とが連動したことにより、主体が新たに活性化したこと
- ④「ESD 関西」が介在したこと

それから、豊中が ESD を受容しえた主体的な側面として、どのような主体＝担い手が存在し、かつまたその主体がどのような対応をしたのか見てみましょう。

第 1 に、「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」と「とよなか国際交流協会」の 2 つの組織の存在が中間組織としての役割を担ったことが大きいといえます。やはり、ESD の受容に当たっては、行政と市民を媒介したり、市民同士や NPO 同士を媒介したり、場合によっては行政のセクション間を媒介したりする役割を担う中間組織が必要です。

それと、ESD という包括的な教育アプローチは、必然的に「異業種・異部門」間を媒介し、かつまた ESD として新機軸を打ち立てるリンケージ（連携）戦略を担える主体が必要不可欠となります。豊中の場合、そうした中間組織の役割とリンケージ戦略の遂行を、文字どおり「二枚看板」として、「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」と「とよなか国際交流協会」が担ったわけです。また、「とよなか国際交流協会」の発案で、さまざまな主体を連結する「とよなか ESD」というネットワークが立ちあがりました。

第 2 に、行政が当事者意識をもって積極的かつ真摯に ESD を受容・展開しようとしたことが重要です。ESD を市民が自主的に行えばよいものと捉えるのではなく、行政は当事者意識を持って ESD を受容・展開する必要があります。豊中では環境部環境政策課が「豊中市環境基本計画」を見直しつつ、これを推進するために、2005 年度の新規予算に ESD 関連の施策として予算計上を検討しています。

じつは、このこともタイムリーだったのです。「とよなかアジェンダ 21」の中間見直しとあわせて、行政サイドが所管する「豊中市環境基本計画」も中間見直しを行いました。そして、仕切り直しをしたうえで、「豊中市環境基本計画」を推進するために、ESD の施策化が日程にのぼった次第です。

第 3 に、ESD と「とよなかアジェンダ 21」とが連動したことにより、各主体が新たに活性化しました。豊中では、2009 年に「とよなかアジェンダ 21」と「豊中市環境基本計画」とを抜本的に見直す予定ですが、そのさい、本格的なローカル・アジェンダ 21 の策定が視野に入っています。本格的なローカル・アジェンダ 21 とは、市民や事業者の「環境行動計画」や「環境配慮指針」のレベルではなく、あらためて持続可能な地域社会として豊中市をリードする市の総合計画に値するものです。そうした、本格的なローカル・アジェンダ 21 を策定し、これを実施しえる市民をエンパワーメントする学びとして ESD が着目された次第です。ここに、ESD とローカル・アジェンダ 21 とがはっきりと連動し始めました。

そして、ESD を担う「とよなか国際交流協会」や「とよなか市民環境会議アジェンダ 21」そして豊中市環境部環境政策課などの各主体が、このように ESD の展開する方向性やターゲットをしっかりと見据えることにより、新たに活性化しました。いわば「水魚の交わり」といえるでしょう。

ここから確認できることは、地域の主体が第 1 ステップの ESD の受容を試みるとき、同時に第 2 ステップの ESD の展開が見定められているからこそ、ESD の受容が容易になるということです。

第 4 に、「ESD 関西」の存在も小さくないと思います。「ESD 関西」による豊中への情報提供や豊中で学習会の共催は有効に機能したといえます。

## 「ESD 関西」という存在の介在

それでは、「ESD 関西」という存在と、豊中への介在について触れてみたいと思います。

「ESD 関西」は、ESD に関心のある研究者・専門家・実践者からなる関西在住のメンバーのゆるやかな機能的な集まりです。現在、常設の事務局はありません。事務局長は大阪 YMCA の浜本裕子さんが担当しております。関西もしくは近畿地方の地域から ESD に関する説明や情報提供、学習会などのリクエストがあれば、メンバーを派遣しています。守備範囲は、さしづめ、関西という中域です。今後、「ESD 関西」がどのように発展するのかは、メンバーにもわかっていません。「最初に行動ありき」というところでしょうか、行動しながら考えていくという関西風の気質で運営されています。なお、「ESD 関西」のメンバーの一部は ESD-J の理事を兼ねておりますが、「ESD 関西」は ESD-J のブランチではなく、独立した別組織です。



2004 年 12 月 3 日、「とよなか環境展」への出展

その「ESD 関西」が豊中へ介在するさい、両者を接合する役割を担っていただいたのが、「とよなか国際交流協会」の榎井縁事業課長です。そのバイタリッシュな榎井さんが、「ESD 関西」と豊中とを接合しつつ、「ESD 関西」が豊中へ介在していく起点となる学習会を企画し、そして ESD を豊中に積極的に受容してきた姿勢は、特筆に値します。静かに省察してみるならば、榎井さんのようなキーパーソンの存在と活躍は、ESD の地域受容にとって不可欠な要件だといえます。

そして、「ESD 関西」による豊中での学習会において、わたくしが再三強調したのは次の諸点です。

- ① ESD のコンテンツやプログラム、アクティビティ、もしくはカリキュラムは地域の自己決定によって自前で創ること
- ② ESD とは、とりわけ地域においては、持続可能な地域社会の形成を目指すための包括的・社会的課題解決学習であること
- ③ 地域における ESD の拠点として「ESD コンソーシアム」を制度化すること
- ④ 地方分権・市民自治の流れは、いずれ「自律補完性の原理」が底流となること
- ⑤ 豊中の実践は、いわば「楠木正成効果」となること

紙幅の都合でそれぞれの点に関するコメントは省略しますが、最後の 5 点目の意味は、ESD の地域受容にあたって、豊中が一つのモデルを全国の地域にアピールするということです。

詳しくは、拙稿「地域における『持続可能な開発のための教育 (ESD)』の受容と展開と発展～『ESD 中間支援組織』と『ESD コンソーシアム』の構想～」、石川聡子編『環境教育は持続可能な社会を創る』（東信堂、2005 年刊行予定）を参照ください。

最後になりますが、豊中における ESD の実践が持続可能な都市＝豊中の創造につながることを心より祈念いたします。

# 未来へのまなびをはじめよう

「国連 持続可能な開発のための教育の 10 年」キックオフミーティング報告

- 開催日** 2005 年 3 月 6 日（日）13：30 - 16：00
- 場 所** 立教大学 太刀川記念館 3F 多目的ホール
- 主 催** NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）、読売新聞社
- 共 催** NPO 法人 NPO 研修情報センター、NPO 法人 開発教育協会、環境 NGO「EG 倶楽部」、NPO 法人環境文化のための対話研究所、国連広報センター、NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター、NPO 法人自然体験活動推進協議会、世界女性会議岡山連絡会、社団法人日本環境教育フォーラム、社団法人日本ネイチャーゲーム協会、社団法人日本ユネスコ協会連盟、社団法人農山漁村文化協会（五十音順）
- 協 力** ESD 関西、NPO 法人 ECOPLUS、エコ・リーグ（全国青年環境連盟）、岡山ユネスコ協会、社団法人ガールスカウト日本連盟、NPO 法人環境カウンセラー全国連合会、環境・国際研究会、財団法人キープ協会、共育 NGO「To Be」、教育協力 NGO ネットワーク、NPO 法人国際協力 NGO センター、市民がつくる政策調査会、NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議、NPO 法人読書 Do、NPO 法人日本 NPO センター、日本環境教育学会、財団法人日本自然保護協会、財団法人日本レクリエーション協会、東アジア環境情報発信所、有限会社プラス・サーキュレーション・ジャパン、財団法人ボーイスカウト日本連盟、母乳育児支援ネットワーク
- 後 援** 文部科学省、外務省、環境省、国際連合大学

## プログラム

- 13：30 オープニング
- 13：35 基調講演 1「ESD の 10 年がめざすもの」  
シェルダン・シェーファー／ユネスコバンコク事務所長
- 14：05 基調講演 2「100 人みんなが幸せに暮らせる村をつくろう」  
池田 香代子／ドイツ文学翻訳家、口承文芸研究家
- 14：25 ESD-J からの提言「2005 年を実りあるスタートにするために」  
阿部 治／ESD-J 代表理事
- 14：45 — 休憩 —
- 14：55 朗読 磯田 禎子／歌と語りの宅配便代表
- 15：00 リレートーク「ESD の 10 年への提案」  
地域 岡山市長 萩原 誠司／財団法人とよなか国際交流協会 事業課長 榎井 縁  
日本政府 外務省 大臣官房 国際社会協力部長 神余 隆博  
環境省 大臣官房 審議官 桜井 康好／文部科学省 国際統括官 補佐 浅井 孝司  
産業界 社団法人日本経済団体連合会 社会貢献担当者懇談会座長 長谷川 公彦  
マスメディア 読売新聞社 調査研究本部 主任研究員 岩田 伊津樹  
衆議院議員 小杉 隆
- 15：50 キックオフ・セレモニー（～ 16：00）
- 16：30 交流会（～ 18：00）

全体司会 ESD-J 事務局長 村上 千里





ヨハネスブルグサミットにおいて日本が提唱し実現した「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」がスタートした。3月1日のニューヨーク国連本部で開催された国際式典に続き、提唱国日本においてはESD-Jが呼びかけ、ESDの10年キックオフミーティングを開催した。

この会議の目的は、NPO/NGOをはじめ、国際機関、政府、産業界、地域、国会議員など、持続可能な社会づくりにかかわるさまざまな関係セクターのキーパーソンが集い、このESDの10年にどのような期待をし、なにを実現していきたいと思っているかを語り合う場を創出すること、マスコミをとおしてESDの10年を多くの人びとに告知し、この10年を追い風に、よりよい社会を創るための教育活動・学習活動が活発化していく契機とすることである。なお、ミーティングのようすは、2005年3月19日付読売新聞一面特集記事として掲載された(132～133ページ参照)。

## 開会のことば

ESD-J 理事竹内 よし子さんによる、「地球規模で考え、地域でESDに取り組み、自ら考えるという思い」を共有することが、持続可能な社会に向けて世界が少しずつ変わっていくのではないかと、という問いかけと、それを参加者と分かち合う拍手のアクティビティとともに、キックオフミーティングを開会した。



## 基調講演 1 「ESD の 10 年がめざすもの」 シェルダン・シェーフアーさん

ESD の 10 年がめざすのは、世界のすべての人が持続可能な社会を築くために必要な価値観、行動、ライフスタイルを学ぶ機会を享受できるようにすることである。持続可能な開発という概念を支える社会・環境・経済の 3 つの柱に加え、ユネスコは、地域ごとの多様な文化をそれらの基盤とし、これら 4 つの要素を平等に包括的にとらえている。生物多様性と文化の多様性の両方が持続可能でなければならない。

ESD には、ステークホルダーをつなげるパートナーシップ、学際的総合的なアプローチ、価値観主導であらゆる分野の問題をとらえること、批判的な思考と問題解決をめざした参加型の（学校の教室で教える従来型の教育にとどまらず、地域に根ざした人びとが中心になって形づくる）教育が必要である。ESD の 10 年の目標は、持続可能な開発を実現するためには、教育・学習が中心的役割を果たすことを多くの人に理解してもらうこと、連携・ネットワークの強化により、あらゆるレベルであらゆる学習の場を提供すること、の 2 点である。

ユネスコは、国際実施計画に見られる目標を推進していくとともに、国連レベルでのリーダーシップの発揮、各国レベルでの力を発揮するお手伝い、官民の協力、市民社会での参加型の活動推進、モニタリングおよび評価など、ESD を広域にさまざまな課題を網羅する形ですすめていきたい。アジア太平洋地域の ESD の 10 年推進に関しては、教育、伝来の知識・学びのシステムと現代の知識の統合、地域性などについて分析し、アジアの抱えるさまざまな社会問題の基礎に、環境教育が必要だという結果にいたった。

ESD の 10 年提唱国として、日本はアジア太平洋地域でリーダーシップを発揮してほしい。情報交換、IT、ワークショップなどの技術協力、国内外での官民のパートナーシップの促進、ESD 専門家の育成、教材・情報資料の作成を国内外で実施してほしい。また、ESD の実践モデルの構築、プロジェクトの策定、資金調達の面で大きな貢献ができるだろう。どのようにしてさまざまな関係者間の連絡調整の仕組みをつくるのか、誰が決定していくのが、日本の ESD 推進における成否の重要な鍵となる。



## 基調講演 2 「100 人みんなが幸せに暮らせる村をつくろう」 池田 香代子さん

環境学者ドネラ・メドウズさんが、1990 年に書いた新聞コラムが発端となったチェーンメールを書き直した「世界がもし 100 人の村だったら」をきっかけに、ESD に関連することを学んだ。このドネラさんが、別の新聞コラムに、「スリランカで考えた、人びとが幸せになる 5 つの条件」を書いている。きれいな環境（空気・水・大地）があること、戦争や飢饉などのために今いるところから逃げなくていいこと、予防を含めた基礎的医療を受けられること、基礎的な教育を受けられること、伝統の文化に誇りをもち、それを楽しむことができること。ここには、お金持ちにならなければ幸せになれないという考え方はない。

今、パキスタンのアフガニスタン難民キャンプにある小学校を、友人と支援している。生徒数 200 人



のはずが、開校すると400人になってしまった。「送るお金も倍になるのか？」と聞いたら、「なんとかなる」と笑われ、私は恥ずかしくなった。この人たちは、ぎりぎりまで分かち合ってきたから今まで生き延びたのだ。一方で、私たちは電車の座席も譲り合わない。どちらがエレガントな共同体を築いていると言えるだろうか。

私は口承文学研究者として、無文字文化を尊敬している。だから、「100人の村」の初期原稿では、識字に関する部分を削っていた。しかし、アムネスティ・インターナショナルの人に反対された。今は、どんな伝統社会でも、外からの影響をまぬがれることはできず、文字を知らないことで、不本意な人身売買や土地買収に巻き込まれたり、民主主義（選挙）に参加できなかったりするからだ。



私はそういうことをなにも知らなかったが、私だけでなく、私たちは知らないことが多すぎるのではないだろうか。だから、私たち自身が学ぶことが重要だ。今は、識字の10年とESDの10年が両輪の輪のようになって世界を持続可能にしていく努力が必要だと思うようになった。そのためには、援助よりも債務帳消しが火急の課題だ。最貧国の債務をすべて帳消ししても、債権国では1人当たり250円から8,000円の負担になるだけという試算がある。50数カ国の自助のきっかけになるなら、安いもの。ところが、アジアの津波被災国の債務帳消しすら、「国の格下げにつながるから気の毒」として、先のロンドンG8で反対した国が日本。

先ほどシェフアーさんから、ニューヨークで開催されたESDの10年記念式で、日本の元文部大臣が「もったいない」という言葉を紹介し、参加者が感銘を受けたという話があったが、その日本は毎年2,000万tという世界の食べ残しをしている。世界の食糧援助の総計は1,000万t。ESDの10年で、私たちは私たちの姿をもっと知り、よりよい世界へとつながる意思決定をしていくことを学ばなければならない。たたら製鉄で有名な島根県の吉田村では、一千年以上の間、山林を持続的に使う知恵をもち続けてきた。私たちはそういった地域の知恵を掘り起こし、人びとの声に耳を傾け、「もったいない」という言葉を本当に胸を張って世界の人びとに紹介できるような文化を、再び手にしなければならない。

### ESD-Jからの提案 「2005年を実りあるスタートにするために」 阿部 治さん

ESDの10年は、政府のみならず、日本国民の一人ひとりが誇れる世界への提案である。この提案には次のような意味がある。

ESDは国際貢献：さまざまな国際的な財政支援にもかかわらず、「お金は出しているがなにもしていない」という評価がある。ESDはこうした日本に対する世界の見方を変えていくものになる。日本の国際貢献のなかで、持続可能な未来をつくる「人」を育てることこそが、これからの国際貢献の鍵になる。

ESDは教育改革：学習者が教育の主人公であるという参加型の教育、社会の構成員として未来をつくっていくという自己肯定感・達成感を感じられる教育、コミュニケーション能力を育む教育を広く行っていく。すべての人びとが生涯にわたり学習していく場をつくっていく。

ESD は国づくり：社会・文化の多様性を尊重しながら、地域が主人公になっていく国づくりとなる。教育と学習を通じて、「世直し」をしていくことが ESD である。

多くの方々が閉塞感に苛まれている日本。ESD の 10 年を私たちの生活に引きつけて考えると、ESD は、私たちがこの閉塞感をうち破り、子どもたちが希望をもち、大人たちも元気になっていくための活動である。ESD では、今までの学校型の教育だけではなく、参加・対話・体験を通じて、共に生きる力、お互いにつながりあう力、参画する力の三つの力を育てていく。そのなかで、私たち自身が元気になり、その元気をほかの人びと、子どもたちに伝えていくことが ESD の 10 年である。ESD の 10 年を具体化していくために、私たちは 2003 年 6 月 ESD-J を設立した。

ESD-J は、ESD にかかわる NGO のネットワーク構築、政府などへの政策提言と協働実施、社会をつくる仕組みに NGO や市民が参画する仕組みをつくる、といったことをミッションとしている。今日のラウンドテーブル（円卓）のように、ESD-J の役割は、ESD にかかわる政府、NGO、地域、メディアなどあらゆる主体をつなぐ、同時に、関心のあるあらゆる NGO・市民をつなぐ役割を果たしていくことである。さらに、行動を提案し、協働主体として行動していくことが役割である。ESD が現在と未来、地域と世界を結ぶ、日本の社会を持続可能な社会に変えていく、子どもと大人をつないでいく、さまざまなことにつながっていくと確信している。

このようなことを実現していくため、ESD-J は、日本の政府が緊急にするべき課題として、省庁が連携・参画する推進本部を内閣府に設ける、あらゆるステークホルダーが参画する国レベルの教育の 10 年協議会を設置、2005 年度内に日本実施計画を策定、地域の教育の 10 年推進会議の設置を促すような取組みを支援する、ということを提案してきている。今日のこの場が、日本における ESD の 10 年、つまり「未来への学び」の始まりである。10 年後、私は、今よりも元気になっていることを確信している。



### 朗読

磯田 禎子さんにより、桃井国志さんの『月を見る』、谷川俊太郎の詩『朝』が朗読された。

### リレートーク

先駆的に ESD をすすめている地域（岡山市、豊中市）、省庁（環境・外務・文科各省）、産業界（経団連）、メディア（読売新聞社）、国会議員という ESD に関連する各セクターを代表するステークホルダーがラウンドテーブルに着き、阿部治さんの司会で、リレートークを行った。多くの講演者が各人のもち時間 5 分を大幅に超えて、それぞれの立場から思いをこめて、ESD についての取組みを語った。本来であればこの後、互いの取組みに対して意見交換を行い、今後のすすめ方について議論を行いたいところ

であったが、時間的制約のなかではかなわず、このようなラウンドテーブルミーティングを月に一度行うことを提案して、リレートークが終了した。

## キックオフセレモニー

キックオフミーティング参加者一人ひとりが、ESDの10年のステークホルダーである。紙飛行機に、ESDの10年で実現したいこと、そのなかで各人が実行したいことなどを書き、ESDの10年へのTake off（離陸）への思いをこめて、総勢198人の参加者全員が紙飛行機をいっせいに飛ばし、メッセージを交換した。



## 交流会

交流会では、キックオフミーティングの開催に先駆けて募集した「今の地球・今の社会で10年後にも残したいこと、もっと広げたいこと」や「10年後にはなくしてしまいたいこと」に対する写真・メッセージ、セレモニーにおいて飛ばされた紙飛行機のメッセージを、スタッフと参加者の有志がまとめ、会場前方に貼り出した。参加者は、コップ、箸、皿を持参で、有機農法によるベジタリアンフードを食し、各自の取組み、ESDへの思いについて歓談した。



参加者をまきこんでイメージ募集、紙飛行機の貼り出し作業



荻原 誠司さん

地域：岡山市

岡山市長

地域には環境保全活動をしてくれ、と頼まなくても、てんでバラバラで動いてくれている人たちがいる。学ばせてもらおうという姿勢で、全国どこにでも大勢いるこういう人たちをつなぎ、ほめることが、ESD の運動の成功につながると確信している。

## ラウンド

浅井 孝司さん

日本政府：文部科学省

国際統括官 補佐

ESD は新しいものではない。人権、国際教育、男女共同参画、健康・エイズ教育、環境教育、防災教育、産官学協力などの分野を ESD で推進。持続可能性ということを念頭においてすべての教育をすすめていくことが ESD につながる。ユネスコへの資金協力をとおして、開発途上国向けの教材やカリキュラム開発を支援、国際シンポジウムを開催する。



岩田 伊津樹さん

マスメディア：読売新聞社

調査研究本部 主任研究員

よい取組みを社会的合意に高めることが必要で、そこにメディアの果たす役割が出てくる。今までとりこぼされてきたようなさまざまな活動を ESD の 10 年という枠組みでとらえ直し、おりに触れて世の中に伝えていこうと読売新聞では決めた。事実と驚きを

現場から考え、子どもたちや地域の人たちといっしょに伝えたい。



小杉 隆さん

国会議員：衆議院議員

海外援助に関する国際会合で、ミレニアム開発目標に関する日本貢献度が最下位と評価された。東アジアの経済発展への貢献、武器輸出をしない、途上国の輸入関税を低額に設定するなどという日本の貢献をもっと正しく評価されるように努力すること、きちんと説明することが大切。



# テーブル

桜井 康好さん

日本政府：環境省

大臣官房審議官

一昨年「環境保全活動・環境教育推進法」が成立。国と民間の活動を連携していくこと、民間の活動をネットワーク化していくことがESDの10年において重要。大学、教育機関、民間の活動を推進・支援をしたい。ESDはチャレンジングな分野なので、ご意見、ご提案をいただきながらやっていきたい。



榎井 縁さん

地域：豊中市

財団法人とよなか国際交流協会事業課長  
ESDは新しいことではない。市のローカルアジェンダの見直しに、環境・子育て支援・国際協力などをテーマに活動している市民が参加。ESDをキーワードに、ライフスタイルブックの制作、学びの場づくりなど、いっしょにできることを考えながら、具体化している。「(E) ええこと (S) すぐに (D) できるやん」という感覚でESDを実行していく。



長谷川 公彦さん

産業界：社団法人日本経済団体連合会

社会貢献担当者懇談会座長

これまでは一社が自分たちだけの考えで社会貢献をしてきたが、人類が共通して抱える社会課題を認識して、関係者とともに、解決に向け自分たちの経営資源を効果的に使っていく活動が求められている。企業の取り組みテーマにも、教育は大きなウェイトをもっている。みなさんといっしょに、地球社会の一員として積極的に責任を果たしたい。



神余 隆博さん

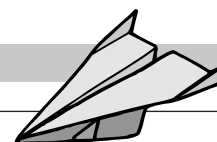
日本政府：外務省

大臣官房 国際社会協力部長

無償・草の根協力、技術協力などを通じて低所得国に対する教育支援を実施。ESDの10年に関し、今後も国際的な推進に継続して貢献していきたい。国と地方と民間が大いに手を携えてやっていくことは珍しいが、やっていかなければならないことだと思う。先進国が、ライフスタイル・価値観を変える必要がある。3R運動(Reduce, Reuse, Recycle)・もったいないという考え方を国際的に広めたい。







## 「ESD の 10 年」 テイクオフ後のこれから

キックオフミーティング後の実行委員会反省会では、今後の ESD-J の活動にむけた課題、提案について話し合った。自分の活動に向けたエネルギーを受け取った参加者も多く、今後も継続的に、ESD フォーラムや見本市などの形態で、エネルギーッシュなイベントを開催すべき、という意見が出た。さらに、ミーティングでのラウンドテーブルが、地域・国といったさまざまなレベルで、多分野・広範なセクターにわたる ESD のステークホルダーを「つなぐ」という ESD-J の役割を象徴しており、このテーブルを図式化すれば、ESD-J の実践的な役割が明確になるのではないか、という提案が出た。

振り返ると、これまでの ESD-J の活動では、「お花理論」に見られるように、ESD の内容を理念的に説明することが多かった。キックオフミーティングでは、ラウンドテーブルが実現し、ESD-J の役割を目に見える形で示すことができた。ESD-J はこの「つなぐ」役割をしっかりと果たすことで、ESD の 10 年を実りあるものにしていきたい。

報告：野口 扶弥子（ESD-J 事務局）

ESD-J 実践イメージ図（案）

